

平成22年度学年末終業式 校長講話（平成23年3月25日）

今、ここにいる高校1年生の皆さんが生まれた頃、16年前に阪神・淡路大震災が発生し、6千人以上の多くの人々が亡くなりました。

この大震災の記憶が少しずつ薄れかけてきた今月11日には、未曾有のマグニチュード9.0という東北関東大地震が、仙台沖の太平洋で発生し、その後に襲ってきた10メートルを超える大津波とともに、甚大な被害を我が国にもたらしました。残念ながら、まさに「災害は忘れた頃にやってくる」の言葉どおりでした。明治以降の日本では最大最悪の地震と津波が、世界で一番地震への備えと訓練がなされている我が国を襲ったのです。

日本のみならず世界中のテレビには、巨大地震で被害を受けた家屋、大型のトラックや漁船までもが、まるでおもちゃのように巨大津波に押し流され、何も残っていない変わり果てた荒地に、放心状態でたたずむ被災者の姿が、鮮烈に映し出されていました。

しかし、テレビの映像は、もうひとつの側面も世界に伝えました。消息を絶った家族を探しながら、食料や水、生活必需品が届くのを待ちながら、冷静さを失っていない日本人の姿でした。そこには略奪や暴動の素振りも感じられない、被災者同士が助け合い、支え合いながら、力強く生きる姿勢を持った大勢の人々の映像でした。

地震で物が散乱しているスーパーで、床に落ちている商品を律儀に拾い、そして列に黙って並んで、お金を払って買い物をする。被災した商店に残ったわずかな食料品を、無償で配る店の前でさえも、順番にきちんと並ぶ住民の姿に、イギリスの新聞では、「日本人は冷静で紳士的に対応している」と目を見張り、欧米諸国で同規模の地震災害が起きた場合に、日本のような対応ができるものだろうかという驚きが書かれています。

また、アメリカの新聞「ウォールストリート・ジャーナル」は社説でこう書いています。「300年に1度の大地震による大混乱の中で、日本人は秩序と冷静さを保ち、膨大な救助・復旧活動をまとめ、そして広く世界の称賛を集めている」と。

首都圏では電力不足を補うために、計画停電が始まりました。停電になれば、道路の交差点の信号も消えてしまいます。大きな主要道路では、警察官の誘導指示による手信号で対応できますが、一般の道路までは警察官が配置されません。

そんな状況の中で、一人の外国人の方がテレビのインタビューにこう答えていました。「信号が全く消えている中で、1回に1台の車しか前に進めないのに、誰もが譲り合い、穏やかに運転していた。複雑な交差点で、交通が10分以上完全にマヒしていたが、その間、譲られたお礼の意味の短いクラクションの音以外は、全く耳にしなかった。その落ち着いた静けさに感動した。日本がますます好きになった。」このインタビューを聞き、我々が失いかけていた日本人本来の持っている良さや素晴らしさが、普段は隠れている優しさと強さが再発見できた気がして、私も感動しました。

停電するとそれを直す人がいます。断水をするとそれを直す人がいます。原発で事故が起きるとそれを直しに行く人がいます。当たり前ですが、様々な事故やトラブルが、勝手に自然に復旧している訳じゃありません。強い責任感と使命感を持って、この寒空の中で真剣に懸命に頑張ってくれている大勢の人々がいることを、私たちは忘れてはならないのです。

大震災と巨大津波、そして原発事故という三つの惨劇から立ち直るとき、日本の国際的な評価はいっそう高まるでしょう。GDPが何位に下がろうと関係ありません。日本という国の真の強さに、世界の注目と称賛が向けられている今、そしてその真価を問われている今、私たちは「がんばろう、日本」の合言葉のもと、被災地の復興に向けて一致団結し、元気と勇気を持って前向きに歩むと共に、被災者の方々を思いやり、助け合い、支え合っていくことが大切だと思います。

また、近年、大地震や異常気象による自然災害が、世界各地で後を絶ちません。私たちは、いつでも、どこでも、誰でもが災害に遭遇する時代に生きています。皆さんには、明日起こるかもしれない来るべき東海大地震に備えながら、命の大切さをかみしめて、一日一日を充実させ、希望を持って生きていくことを忘れないでいただきたいと、心から願っています。

